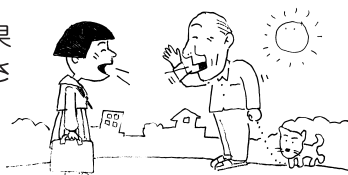


Q5. 「あいさつ運動」が防犯になるのは、どうしてですか？

A5. (あいさつは目を合わせること)

あいさつを交わす時に、しっかり目を合わせることでお互いを確認し、記憶することができます。その際に、防犯を自分の問題としてとらえていれば、自分の大事な町（領域）に不審者が入ってきた場合に直感が働くでしょう。おかしいと思ったら、「どこに行かれるのですか？何かご用ですか？」と続けて声をかけたり、様子を見守ったりすることができます。

悪いことをたくらんでいる人は、人に顔を見られたり、犯罪を目撃されたりすることをおそれます。そのため地域の人から声をかけられると「気がつかれている」「顔を見られた」と感じるはずです。ただの気のないあいさつでは、ここまでの効果は出ませんから、そのあたりを意識してあいさつするようにしましょう。



(町の活性化にもつながる)

あいさつ運動のよいところは、防犯対策になるだけでなく、あいさつすることで顔見知りが増えていくことです。

《出典：「犯罪の危険から子どもを守る！子どもと親の不安を解消する77のヒント」》

Q6. 防犯の基本をご存知ですか？

A6. 防犯には「遮断」「威嚇」「阻止」「回避」「隔離」「強化」「教育」という、段階の違う7つのアプローチがあるとされています。

「遮断」＝犯罪を遮断し、犯罪に遭わないようにする

(学校であれば門に施錠する、入館者チェックを行うなど)

「威嚇」＝犯罪者を威嚇して犯罪を起こさせない

(大声を出し、防犯ブザーを鳴らすなど)

「阻止」＝犯罪を阻止する(催涙スプレーや護身術などを使う)

「回避」＝犯罪者を回避する(犯罪の起こりそうな場所に行かない)

「隔離」＝犯罪者を隔離する、別の場所に行かせてしまう

「強化」＝被害者そのものを強くして犯罪に遭わないようにする

「教育」＝加害者を矯正して犯罪者にさせない

専門家が行う防犯も、基本的にはこの7つのアプローチの組合せによるものです。

《出典：「被害者の親と呼ばれないために加害者の親と呼ばせないために(金の星社)」》

Q7. 「ハインリッヒの法則」をご存知ですか？

A7. 危機管理の世界には「ハインリッヒの法則」というものがあります。これは、「1件の大事件の後ろには29件の小事件があり、その裏には300件の事件にならない事件がある」という法則です。つまり大まかに言えば29件の「殴られた」という小さな事件があって、その前には300件の「学校に入られた」という予兆があった可能性があるのです。小さな予兆を見逃さず、その段階で食い止められるような予防措置をとったなら、その後の事件は起こらなかったかもしれません。

《出典：「被害者の親と呼ばれないために加害者の親と呼ばせないために(金の星社)」》

(4) 「安全安心」Q&A (団体・グループ等の取り組み編)

Q1. 自主防犯活動はどのような活動から始めれば良いですか？

A1. 現在、全国の防犯ボランティア団体では、防犯パトロール、防犯広報、環境浄化、防犯指導・診断、子どもの保護・誘導、危険箇所点検などの活動が行われています。

自主防犯活動を成功させるポイントは、「無理をせず・できることから」始めることです。

1979年にアメリカニューヨークで設立され、地下鉄のパトロール活動などにより、ニューヨークの治安回復に貢献している防犯ボランティア団体「ガーディアン・エンジェルズ」の場合、彼らが最初に始めた活動は、街に落ちているゴミ拾いでした。

これは、街の環境の悪化が次々と犯罪を誘発させ、治安を悪化させていることに着目した「破れ窓理論」に基づくものでした。はじめから、完全なものを求めても効果は期待できません。例えば、町内でのあいさつ、声かけ活動や散歩、買い物時のパトロール、通学路の立番活動でも犯罪者を寄せ付けず人の目を確保し、防犯灯の点検、落書きの消去などの環境浄化活動でも犯罪企図者の接近を防止するという効果があります。また、これらの活動は地域の共同意識の向上につながります。

